

奥
道中膝栗毛四篇

上



13
1164
62



1164
62

真羽一覽道中膝栗毛四編序

久松^{つぎ}うらむと毒^{どく}の石^{いし}碑^ひいさう^{いさう}の^の神^{かみ}堂^{だう}

高^{たか}の^の十^{じゅう}返^{へん}舎^{しゃ}。高^{たか}子^こ一^{いつ}白^{はく}を^を出^で出^でと^と思^{おも}ふ^ふを。

高^{たか}枝^{えだ}栗^栗由^ゆく^く高^{たか}栗^栗産^{さん}。高^{たか}栗^栗山^{さん}人^{じん}無^む栗^栗の。

高^{たか}栗^栗の^のゆ^ゆめ^め志^しを^を栗^栗也^や。高^{たか}栗^栗の^のゆ^ゆめ^め志^しを^を栗^栗也^や。

高^{たか}栗^栗の^のゆ^ゆめ^め志^しを^を栗^栗也^や。高^{たか}栗^栗の^のゆ^ゆめ^め志^しを^を栗^栗也^や。



高栗山

此結栗原の柿葉の如栗駒山の柿
 木枕の一人連多も此の栗の中
 記しりし栗の坊主はひろくろくろり
 が河の里を栗梅の娘は栗皮栗の
 頭陀袋知恵のつるを焼栗のを孫と
 趣向の鬼げの栗毛を小栗が栗志の川免

栗の不動のいしくも栗丸と名
 呼ばる栗柄を師の天拜山を法山様ハ
 栗の海栗の妙子で汲ぐ谷を赤中の栗
 ひろくろく八十笑ひの種は山栗角の
 右をさる毛結の栗鬼十む丹波の斎打栗
 親らくは進栗谷川を栗坂の戦ひも

桃栗の年ごえんまね後二年ごふたね後三年ごさんね後四年ごよね後五年ごごね後六年ごろね後七年ごしちね後八年ごはちね後九年ごくにね後十年ごじふね後十一年ごじふいちね後十二年ごじふにね後十三年ごじふさんね後十四年ごじふよね後十五年ごじふごね後十六年ごじふろね後十七年ごじふしちね後十八年ごじふはちね後十九年ごじふくにね後二十年ごじふじふね

嘉永二の年
 心川貴



天神と
 千菊屋

北八

此のくをかくの
 神
 あらゆるまを
 梅あまを

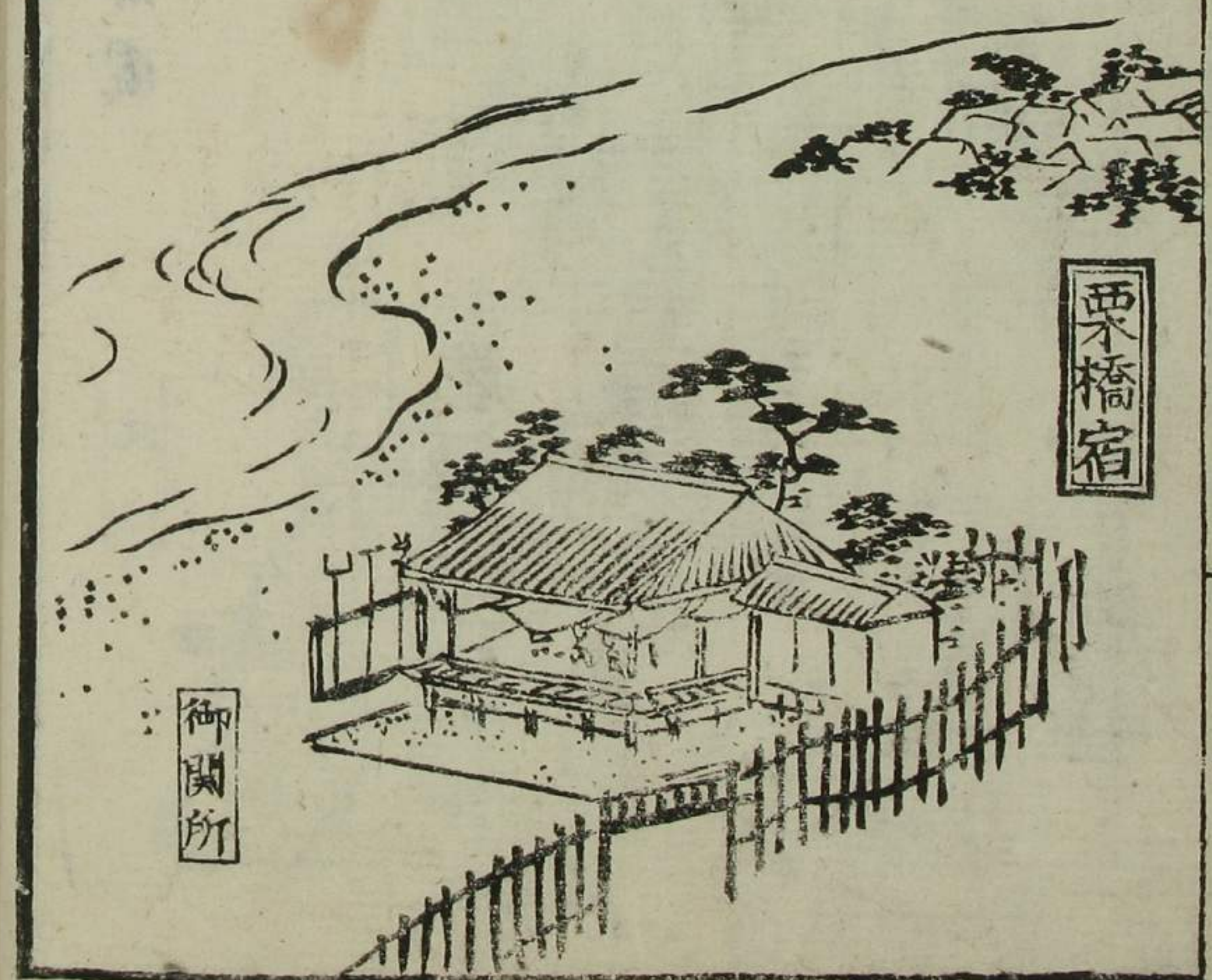
弥次郎兵衛

國一十

日光驛見聞雜記云云、
 界の論夫の物語、栗橋の栗の
 字の栗とて、ゆめ多栗餅ハ
 當所の名物なりといふとて
 門生の笑ひて予小語る無程
 光寺の笑ひて予小語る無程
 墓ハ川向ある室治戸といふ所ニ
 ありといひ、ゆめ多其文字を
 問ふゆゑ、いひちよとて
 たゞとも讀字ありと
 答ふ草字もて、室治戸
 他もゆめ多かゝる者一々
 編史の栗葉門字とて、
 えくつとて、ゆめ多とてあれ
 一九一手上終る旅舎せしむ

栗橋宿

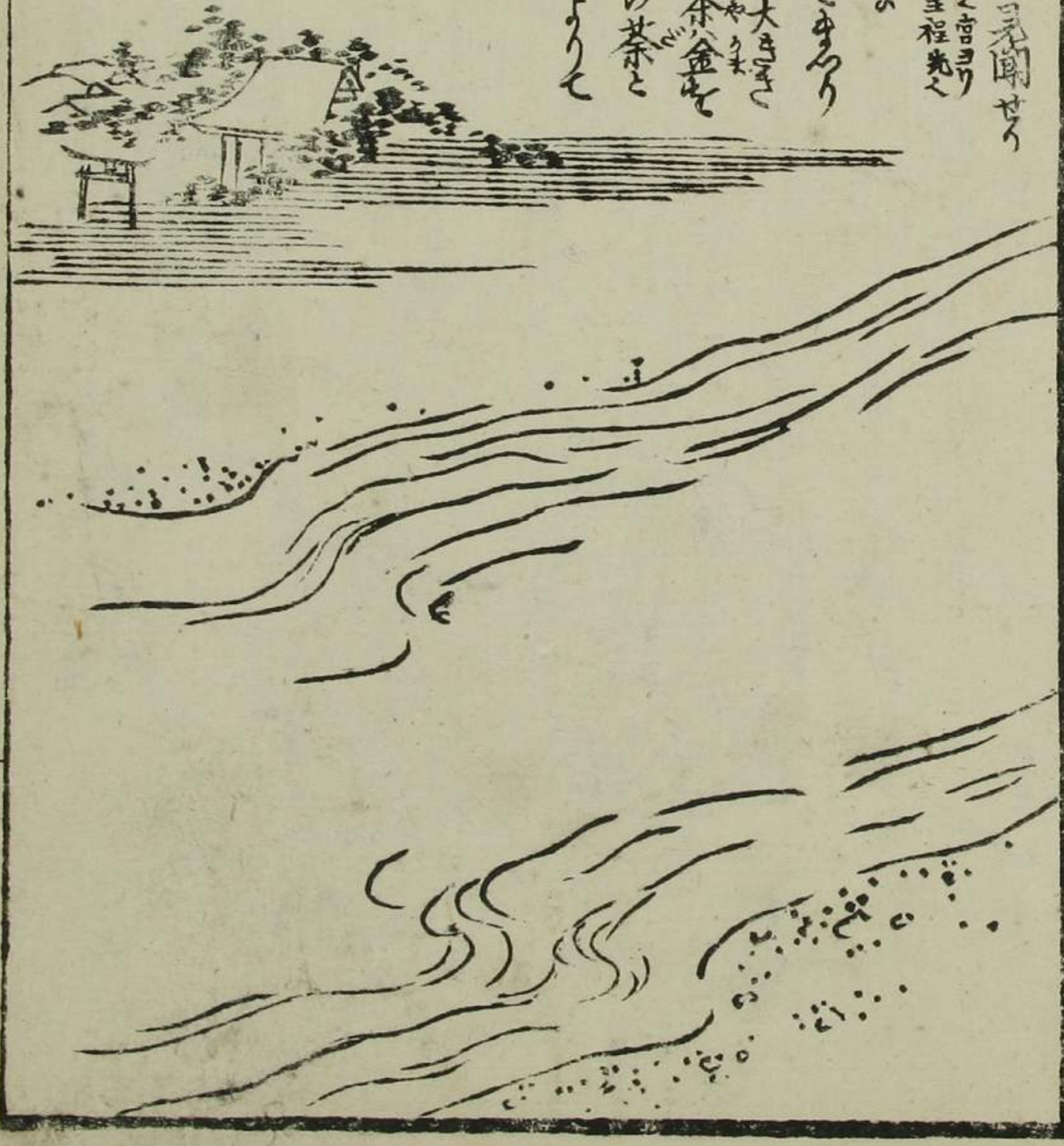
御關所



なまこれ、ゆめ多を聞せり
 哉、記を九十九里、
 登壇見村といふ所ニ
 軍茶種、夜双明王とて、
 ありとて、廣前は、
 一丈余廻るゆめ多茶金を
 安置とて、軍茶利の茶と
 茶と文字の似方によりて
 士人のあやまるとる事
 見聞雜記より、
 所いひ、ゆめ多
 田舎の一頁、
 といふ

八幡香取西社

中田宿



古事記

八千矛神歌
佐用婆比尔
阿理多々斯
用婆比迹阿
理加用婆勢云

万葉集卷之十三

このりくの
とつせをらほ
よつとひとる

竹取物語
かみの夜も
こがとよの
のそかかいまま
まどにあつ
さるくらよりえ



國其

お蝶

よむいとい
ひいなる

源氏物語

玉首白之卷

けさう人ハ
トウまかきま
ふるせこそ
よぞひとい
いひまれあゝあるを
男の人よとあるを
よつあまゝるあり



再出
弥次郎共備

綿妻のおりまけ

つとや夜遠星

今徳



三世 落栗庵木網

一 奥羽道中 栗毛第四編 卷之上

十返舎一九著



武蔵國葛飾郡栗橋宿ハ民家軒を班て那も
 昌の地あり。房川の縁西の方小添て所開新あり。土人
 此房川を祢て坂東太郎といふ。則利根川あり。川橋川
 原と共に三百間ありて。関東第一の大河あり。源ハ上野
 の奥あり。文殊山より出く下野武蔵下総を經く

未^まハ海^{うみ}入^い目^め光^{くわう}山^{さん}叅^{さん}詣^ぎの信^{しん}者^や真^ま羽^う上^{かみ}下^{かみ}の旅^{りょ}人^{じん}を
 川^{かわ}原^{はら}小^こ集^{つひ}て渡^{わた}船^{ふね}をきこふ車^{くるま}曲^{まが}く水^{みづ}のこえまほ却^{かへ}説^{せつ}
 延^{のび}高^{たか}籠^{かご}羅^ら房^{ぼう}の糸^{いと}次^{つぎ}糸^{いと}増^ま北^{きた}八^{はち}と共^{とも}小^こ聚^{あつ}橋^{はし}宿^{しゆく}有^ある柏^{かしわ}
 屋^やといへる小^こ歌^か家^かをよとめ曉^{あけぼの}の房^{ぼう}川^{がわ}の御^{おん}園^{えん}所^{しよ}を概^か
 中^{なかつ}田^{でん}古^こ河^がの宿^{しゆく}々^々を過^かて目^め光^{くわう}山^{さん}へ詣^ぎ人^{じん}とあ^あら^らり^りあ^あつ^つ
 く曉^{あけぼの}天^{あめ}をま^まつ^つ夜^よ中^{ちゆう}俄^がふ^ふのさ^さじ^じく^く糸^{いと}次^{つぎ}
 去^こ清^{せい}の声^{こゑ}石^{いし}のか^かふ^ふ空^{そら}え^え人^{ひと}々^々多^{おほ}く^くの^のま^ま々^々とよめ^めく
 不^ふど^どふ^ふも^もた^たる^る東^{ひがし}も^もあ^あら^らる^るこ^これ^れは^は虚^{うつら}ぬ^ぬあ^あの^の枕^{まくら}も

ま^まう^うけ^けら^られ^れば^ば延^{のび}高^{たか}起^{おこ}いで^{いで}筑^{つく}羅^ら房^{ぼう}北^{きた}八^{はち}を^を回^{まわ}る^るお^おこ
 して^{して}三^{さん}人^{にん}ひ^ひと^とく^く糸^{いと}次^{つぎ}糸^{いと}増^ま北^{きた}八^{はち}を^を過^かて^て面^{おもて}目^めを^をけ
 い^いり^り見^みる^るふ^ふい^いふ^ふあ^あら^らけ^けん^ん糸^{いと}次^{つぎ}糸^{いと}増^ま北^{きた}八^{はち}の^の街^{まち}渠^か鼠^{ねず}
 の如^{ごと}く^{ごと}あ^あら^らま^まか^から^ら水^{みづ}を^をあ^あび^び四^よつ^つむ^むひ^ひあ^あつ^つて^て面^{おもて}目^めを^をけ
 たる^{たる}あ^あり^りさ^さは^は家^{いえ}内^{うち}の^の人^{ひと}々^々手^て桶^{ぶく}の^の水^{みづ}を^をけ^けあ^あら^らる^る鼻^{はな}
 を^を使^{つか}ま^ます^す男^{おとこ}「[「]お^おの^のお^お客^{きやく}さ^さぬ^ぬの^の雪^{ゆき}隠^{かく}の^の糞^{くそ}凌^{りやう}み^みあ^あへ^へを
 され^{され}て^てそ^そく^くさ^さら^らく^く「[「]お^おん^んあ^あら^らく^くさ^さら^らる^る屋^やの^の日^ひも
 ち^ちア^アた^たま^まさ^さら^らる^るあ^あら^らる^る一^{いつ}体^{てい}こ^この^の原^{はら}さ^さを^を渡^{わた}り^りこ^この

ぶア、くさくて鼻もちがまらなく。車主「召物を
 ぬるせよーてあまから水をうけさがいサア、くけ
 さい、くト あまのきさぐみ男ども係の事、捕をたをさう 延 このいどの 海亭殿
あまのきさぐみ男ども係の事、捕をたをさう 延 このいどの 海亭殿
 まれをア、わんちふるを志まーアモシ、事コレハお連
 さ海、ヤオヤとんアお客をぬらさうまらまら、お
 あまのきさぐみ男ども係の事、捕をたをさう
 いとんで、ア共みぬらさうまらまら、お
 はくさぐ このいどの 海亭殿
 はくさぐ このいどの 海亭殿

ざり打あつてぶつからから、おア、くト、くめく
 のが人の声、ア、み、盗人よとらん、さうまらまら、お
 出と見さう、さうまらまら、お
 行、便、か、ら、出、し、や、む、ら、し、つ、る、ゆ、ん、で、あ、ま、ら、ま、ら、お、肥
 だりけで今のさうまらまら、お
 定、由、さ、う、ま、ら、ま、ら、お、連
 さ、あ、ま、ら、ま、ら、お、連
 く、延、ヤ、レ、を、ア、が、ら、み、氣、の、毒、あ、ま、ら、ま、ら、お、連

新編四書上

七

共てハ遠急のうーカスホッレ笑ア北風が急いサチ

早くもうーあさうくト 亭王よあひさしと二人ふ二人のあはれが
北ハこのうらふおのくおひあふ

北風が急いサチ 吾が此佛の由く己んをーおんか

お前方のあつちへつておんかとあせ入大さふおんか

でおんかの中へ 男共 ぞんぞらおんかやあつち

よく洗めて進せて下さうませうト おんか北ハコ
へあをのりやく

次に入ふ前するは紅糸湯へ遠入さう おんか ぶつて

おれびいろくあさうぞら酒着とらうちやあ

世通りあさうて冒風さうとく おんか 寒いくを

お前の着物と一枚かして呉 おんか 洗まらぬへ

いひあさんかお前ふ一枚備とおれ おんか 感冒 ぞん

あ友達げへのぬへるをらふ おんか やアぬへ今ふ丸洗ひ

をー布子が乾ととけぬへ直お返してやるハ

北ハ直もぬへ おんか 布子の丸洗ひがひるまを

風の二ふ度もひたけへ おんか マアくまらぬへおれ

と繁がある おんか マアく世話のゆける男とト おんか 二つ入あう

合羽をとりては前北

合羽をとりては前北「ア」く孫次さん着物の二面が出
のともふすのまきり
あふ。ソレ雨衣が之牧ある。シト有るからう。之牧
とりの身上がせみ有が〜〜〜併腰くよハ之
牧重で二面が〜〜〜見えろ。下が一牧もあくつちやア
幽霊の中うで下冒風そらう。北「ホ」ニさうぞの。アそ
れぢやアのりるがわる。先生の黒のあめ雨衣の袖へ
足をおんでんでさうぬの代として。己がのを下着ふ
〜ねへその上へ〜呪羅唐のを前うらゑて天神様

の出さへどらうぞ。ナントそれぢやア風が遠入あ〜つと
寒く〜あうらう。北「ウ」まいつつおつま〜〜〜。急が
北ハ装束もて北「ハ」アリ。北「ヒ」イリフウリド。北「ア」サ洒落
ぢと早くゑて子細を物語人あせ〜。睦先生達
持てゐるぞらう。そしてマア夜が明〜早〜くまぢが
たまるめ〜あ〜お居續もちゑがね〜。北「ホ」ニさうぞ〜
それふはけても。コレ北ハ〜前〜とのあめ〜〜〜。あせ
北「あせ〜」あせといつて文あれ程おき〜一人

合羽をとりては前北

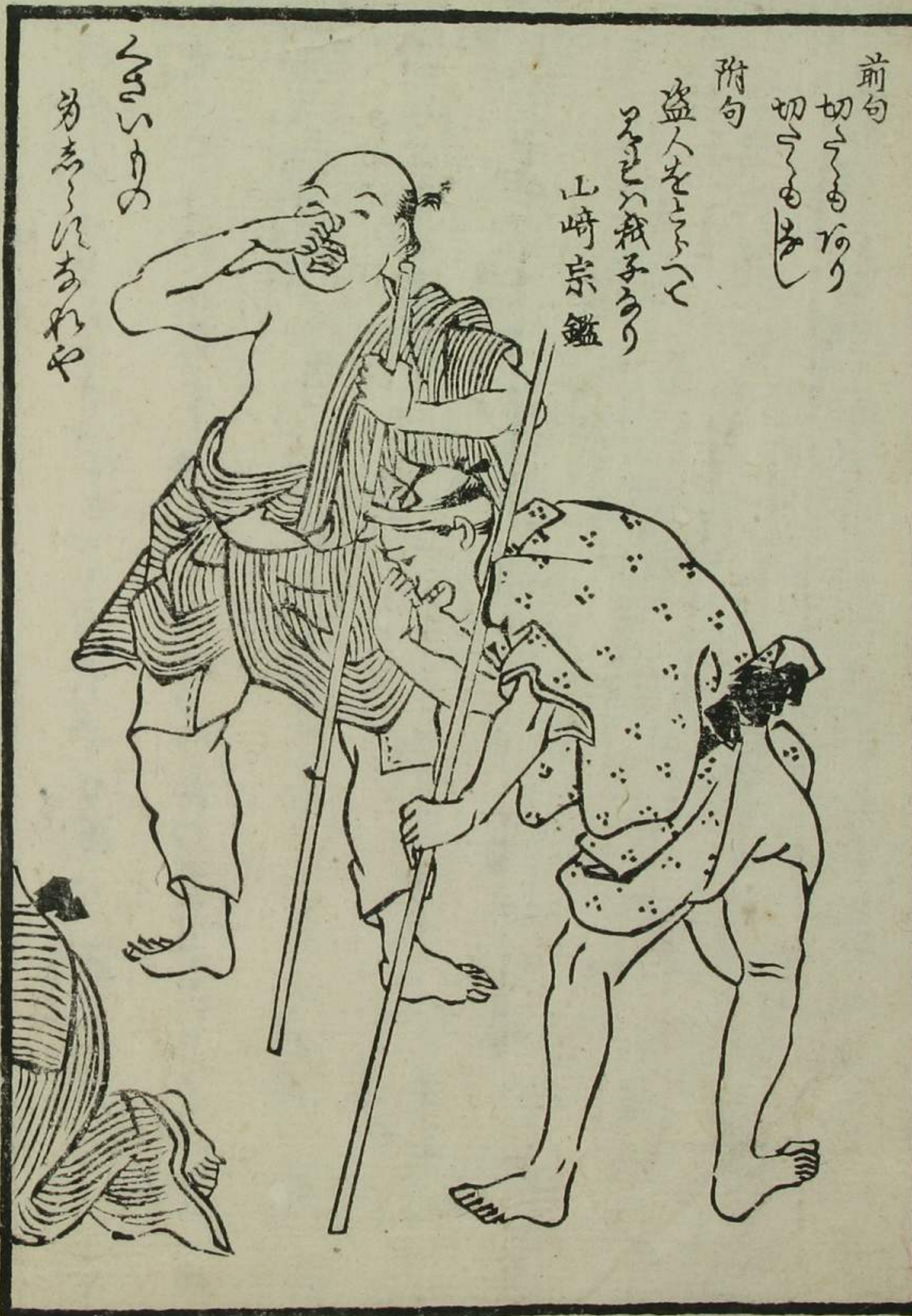
前句
切らも有り
切らもなし

附句

盗人をさすて
さすてハ裁子あり

山崎宗鑑

あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの



あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

六通舎
一三



あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

夜多ふ夢やうとらつこのを醜○そのあんふかくのとらつて
 引ひきとめやアガッて早○オヤく多たせさへまれば圍せう房ちんをぬけ
 出でるまけも祓はらへふいめへま〜いおらア生うまれてまどめて
 圍せう房ちんをぬけて見みる何なんぶう勝ちか手てが〜れ祓はらへ〜ら
 手てを外そと〜とたごの中へ片身かみ落おと〜たのであさま
 から那あの通とりサ余あまり家いえあう〜智ち恵えがぬへ〜思おもつたら
 定さだめて北きた八はちてめへハ笑わらつ〜らうあ〜笑わらつ〜見みる只ただい
 おうぬへ北きた〜ンおいて呉くぬへ人ひとみ着き物ものの二ふた面めんさせ

ておいて笑わらめと呉くぬへもまさま〜其その上うへ 證しやう文もん
 せ入いておいて何なんぶふよらば吾われが〜る〜宵よくめへと
 小せう約やく束そくぢやアぬへッモ〜くその證しやう文もんのりハ真ま平へい
 ぶ。とんぶ女にふひりか〜つて後あ悔い〜 北きた〜ンヤ〜で
 もあるめへ隨ま分ぶんかおも〜ろさうを女にせ〜そまやア
 遠ちげへぬへ手てのあるる〜おいちやアあのくれへ〜女に
 祓はらへ女郎ぢやうらうあもまれど北きた〜それ〜る〜る〜をまぢやア
 一ひと晩ばんざりておき〜らめいされめ〜知しれ〜る〜よ〜氣きい

今宵の四編止

さらしくぬへが。どうもそこよ一ヶ条の難儀うたまるマア
ゆるりと道く。咄さう。何ふあろ早くらをとらと
いてかんどんの先生達ふ頼れとゆとさつちり忘れ
一俵おめへいどういふ誤で空悪をぬけ出かうと
のぶ孫外でもぬへおれが那女の事ふついで急ふえ方
ふ今夜中ふ掛合事があつて一人立ちといつても
手前がむりどめをしてたせぬへうら家内の者ふ

故給あーふ曾登前をぬけて出かうとこのサ大方
さういふ荷物の手前がもつてきてくれるとらうと
思つて居るが大ききあ当ちがひで飯と杯の二杯めが
かつけやアかつて何ごう大が前の屏を食ふ遠ッ
かういふとぬる声があるから。その大ふあつて主人ま
とぬけ出かうと思つて。早くくと大のちえ。真似
をしてあら。ソレ畜生ごと六尺棒を拵てきてどん
と一ツくらのせやアかつたので。モウ主人所らぎらうの音も

おかしな世

十二

出ぬへで。アイタタタと声こゑをききあふ。ソレ大おほいでいまい
 盗人ぬせうとごとぬりて盗賊とうぞくと大声おほいをききあふ。ゆんごから
 家内中うちうちが起おきてきて右みぎの仕合しあひサモウサモウく思おもひ出いして由よし
 ぞつとまゐる。マアあんのふしうらんあ延喜えんぎの惡わるいところふ
 永居ながいひびめんもやど早くさつまうく。北きた由縁よしをきめてゆねの
 からは有ありごうくぬへあま余り馬ま鹿かくくして物ものがいのれぬへ
 一ひとはぶゆきと北きた八はちの殿とのの中うちふ笑わらひを催もよほしそれより
 延高えんこうふかくの次つぎ身を物もの諸宿しよじやくの亭主ていしゆふの昨夜こくやの飲のみ

ぶふ酔よて一ひとへ落おちるといひとらへ家内うちうちそれくへ
 挨拶あいさつして先まこの宿しゆくを立た出いけるふ。孫まご以も希まれ玄げん瑞ずい物もの中ちゆう
 ふおりのふしうわれば。北きた八はちが着きせざる合あひ羽うの出い立た天神てんじん
 の外うへ遊あそとのみみえおてんくの舞まふをもつとを延高えんこう
 が羊やう美み色のいろ頭づ巾きん前まへよりひきまへしう唐たう人の
 頭づのかくむさびつけてふところを道みちとて異お奇き
 方面あつちつたをききあふ。先まふさうてゆくふとみ
 宿中しゆくちゆう狂人きやうじんくことと笑わらふふ。延高えんこう北きた八はち等のら面目めんぼくを

夫うの三人さん一同いっとう往ゆへ居ゐり孫まご次つぎ希まれ去さ清きよを先まへや
 過とり孫まご次つぎ希まれ去さ清きよへ是こゝ業わざと一ひと箇こ唇くち川がわふ近ちかづ
 き例よの茶ちや店てんふよりて所おん園せ所じをこえんまうけをさ
 かんなく唇くち川がわの渡わたをこりこりり行ゆく
 延の高たか北きた八はち等どうハ孫まご次つぎ希まれ去さ清きよをあざけりあざむく
 ときときり北きた八はち等どうでも孫まご次つぎ希まれ去さ清きよの女おんなかかり念あつの女おんなの居ゐ
 めへうああきさぶ。その女おんながこゝいさつかりふ一ひと箇こ唇くち川がわをぬ
 けて迎むかへうととこのを君きみが知しらぬへと思おもつてえ方かたへ掛か

合あふ行ゆとつてこのがをかかくつてありやせん。那あの女おんなの
 全ぜん体てい唇くち川がわの加か十じゅうといふ惡わるふくの洗せんひてある火あてと
 ぢり者ものササ北きた八はち等どうハあんちう入いるぞモシ。それ知しりをして
 孫まご次つぎ希まれ去さ清きよも咄はなししもせまひぶらうが北きた八はち等どうハ先生せんせいの
 めづきけれと道みち中ちゆうぢやア度たら孫まご次つぎ希まれ去さ清きよさんふひとめあ合あ
 てあ伊い次つぎから咄はなしし度たら一ひと箇こ唇くち川がわを考かんふせやうと思おもつ
 て那あの女おんなの身み性じやうを外あの女おんな申まをすおまておののをしる
 てぬく。孫まご次つぎさんふさづけてやうう。今いまふ長ながい

目で心覺ドヤ。後から女お逆掛られてとんごめ
 ふあふお遠へねへ早くそのさぬがえこい子ちんち精一きせ
 ぢあいのりいそ一まは。うらハチそえとアさいらいで
 ござらアモジ北ニお前そんあるりぞと腐らせて突ひをもも
 さぬへらヤア道申の憂をうら一たありやせん。マク氣を
 丈夫お持て見えてあせへ。あつで敵をとらねへと那男
 お意趣のけへ一やうがねへ。レもう所園所ぶアおたま
 人家さろトこれより三人の所園所をえ。夏川をまると後一舟子と海
 と。あまの二にげんきとをあらとあひのうまあひねひかうと

あつた女さうとそをくよりうらとをれが。あつ。目。あまこい。昨。夜。拍。合。へ
 これら一一人あつたうのやとやの女中あつと
 おとまりあされ。孫次郎去清さんのお連つれ。北八さぬ
 ぞぶらま志先刻ふうら侍て番か。トいたれて北八の
 北北ウニヤ。おらアそんあゆのちやアねへ。女一あく。お一
 なされまは家。その北八さぬでありなうらそんあ昔
 であつといそ一やうまは。お連の孫次さんをおうく
 一なされ。お遠ちんひのわい。ヤア孫次さんをあへ
 つれさつ一やうま。神田の八丁堀ちん智面屋孫次

一丁四馬



うしろめ船を
あけく
房川
一返合十九

一丁四馬

公の御上



鯉魚の
領子あはれ
人ゆかり

公の御上

ふたつに四角

十七

希去湯さ毎とりん所書まで勞うてあるからのかくし
 ひとのありませぬ。ああこの方がお連さ毎でござんさま志
 よが母お方北八さ毎お遠ふるのござんませんや。更にお
 るねとおござぬのいさしまた通りうらも此北八も孫次
 どの連お相遠のござんあい。ア、これく先生は生
 らぬををりふものでない。何のおいららぐその北八を
 ものうどうあつても孫次希去湯とりん人の知らぬく
 ちア、それらぐいん。盡くとかうしや。よんも孫次さん

一人夜おせうといをいれし時お前さ毎もい
 おあじやうお引とめてくんさうござんませぬら
 何處も逗留せると孫次さんがいひなされても。どうも
 じやうとをうあくとだまうして。ましやうござん
 と心がゆいさうぬ。程お加十さアお相續してこの渡場
 で網ををってお前方を待たし。モウいくらお相續さ
 きをさうしやれととて取遊をりていぶさうござん。ア
 孫次さんを早く出さう。どうも。どうも。密にござんると

下白筋

一人

どこ迄もお前が相打ちやぞエ。あせこのも〜を
 ながくさ〜のふさ〜ゆれさ。たまぬ〜北コウ色〜
 ありをゆふ女ごぞ。〜やぶらうちがその孫次郎を清
 とりの男の連ぬせよ。お前をさぐさ〜れ此ふ〜さ
 人ぢやアあ〜。たま孫へ訣ひひとゆぬへ。そやア孫次
 さんみ逢あせつてか〜とちま入。遍ぬいひ草をゆひか
 するぐ〜さつちやアどう〜もそんか事ふかり合て
 なるものう。ち〜「あやアアとんごア舟お同船〜」

北「あ〜」
 業あさんなかまあるがあるのう。〜
 知らぬの孫次郎を清ごのよ次郎を清ごのど小藤の
 先で二番更がさいてあされらア。〜吾等〜
 りはゆいつて呉あさんあ〜とんご女ご女〜とんご女ご
 と何がお前とんと女ご。〜やア昨夜お前の連ぬ
 孫次さんみあぐさされて置去ふあつ〜こそとんご
 ぶふ亭主があるあ〜その亭主の身を離〜
 とお前の連ぬの孫次さんいひあされ〜を。お前も知

六の四上

くはれいおし

廿九

ておあさるだらうお北「おいろくおねつをさくぞ何
おれがそんな事を頼りのう那孫次舟を湯とゆふ人
いてへげへお慮つづまご。それを真ふらけらお前の
愚とゆふりけごつまごねへ夢とゆふと思つてあきら
めてしまひあせへせ」それく見あさい孫次さんの慮
言を志つておあさるおろつれお北八さんお遠ひい
あいその口が澄澄ぢやなく。さうくく入連てらんま
い。ままねく北「お、お女ハよくまねく」といふが

ままねへのご。コレ江戸ッ子を見そくおヤかつこう悪く
おさくを吐きやアかると川の申へさらひ込で土左衛門
と改名させるぞおへねへ悪押の強あまぢやアねへ
おんお奴お搦ッてゐると江戸ッ子のけうれごコレ船頭
早く舟を着ねへり。コレ「おん」ぢやあご舟がちつともう
ごうあい船頭「お」がうごりねいもづちつともごれい志あい
ゆのうちら「ア」ごごぬお船頭どんごううらごごく悪く
船改「コレ」めつごふ艚掉とその女おへまエつけて見るが

アノナヨ編二

二一

今、口録

國書



宿の西十町程入りて
宝治戸といふ所あり
こゝふ年ふる杉の大木
ありこれと主人静
御前の墓とといふ
傳記は曰静義經
のあとを

逐ひて
この所
まふま
ふるが美
經奥の
高館ふ
て戦死まこと
聞て力を
落し

俄に病て死しつるを葬せしとあり
其下は一言の宮としてふきだるなり
あり杉の高サ六丈七尺張十五間
圍二丈三尺とぞ



一言宮

あふれと人目
のめけ柳衣
かりひつるまて
君をこぼしやて

武枝又
千燈庵小松

この日の助那奴も是奴も命や丁録へよこに録に命を
 清といふ男を逃しおつれの荒その女の訳をいつ
 ぬへうちへ何造も船の中りやせん誰ごとおりの空房川
 の加十さんアアアアアアアアエト声せうけられ北に
 身の毛もぞろと青葉ふ塩暫の詞も此処途方小
 くれうねるこそをうられ

奥羽 道中膝栗毛第四編卷之上景
 一覽

